

国語科教科主張

1. 国語科における学び

「言葉」は、使い手の映し鏡である。なぜなら、その人の内界から生み出され、選び取り、外界へ発信するそのプロセスは個人特有のものであるからだ。また、同じ言葉を見つめても、言葉の印象や捉えは共通の定義として存在する一定の範囲の中で個人の想像に委ねられているのである。他者とのコミュニティの中で生活する私たちにとって「言葉」は、「よりよく生きる」ために生み出された欠かせないものであり、即ち、その「言葉の力」によって私たちは世界とつながっている。つまり国語科という教科は、子どもの「言葉の力」を磨くことによって、その使い手自身を磨いているのだ。

子どもは自身を取り巻く環境と関わることで「自分の思いを分かち合いたい」「みんなのことを分かち合いたい」「周りのことを知りたい」といった思いをいだく。そうしてその子の中に「自身の言葉」に対する願いを芽吹かせる。そうした願いをもって言葉に出合った子どもは「言葉による見方・考え方」を発揮し、自らの言葉を使って考えを言語化していく。その子の内から紡ぎ出された考え（以後「解釈」）には、その子らしさが映し出されている。そして、その解釈を他者と語り合うことで、「言葉による見方・考え方」を広げながら解釈し直し、言葉の概念を広げたり確かにしたりすることで言語感覚を磨く。こうした営みによって「言葉の力」が培われ、自分らしさが磨かれていく。この営みをくり返すことは、自分らしさで彩られた豊かな人生の創生に寄与するだろう。

2. 本校国語科部が考える『その子らしく学ぶ』

私たち国語科部は、『その子らしさ』には「ものの見方」が包含されていると考える。「ものの見方」は内面にある背景知識や価値観、感性・情緒などとその子のもつ言葉が結びつくことで形づくられ、立場や状況など、外的な要素である周りの環境による影響も受ける。

子どもは解釈の対象となる言葉と出会うと、自らの「ものの見方」を通して、共感や違和感から自分の思いをもち、表したくなる。言葉に対し自分なりに解釈した子どもは、他者と交流する中で、他者の解釈との間に生じた重なりで共感したり、ズレで違和感をいだいたりする。他者にその根拠を聞くことで、その言葉をどのように解釈したのかを理解しようと捉え直す。その際、子どもは、言葉を介して他者の「ものの見方」を感じたり、受け止めたりしながら、「言葉による見方・考え方」を広げていく。このような、自身の言葉に対する願いをもち、「言葉による見方・考え方」を発揮しながらその子の「ものの見方」で言葉を解釈する姿を『その子らしく学ぶ』姿と考えている。

3. 『その子らしく学ぶ』子どもを支える環境設定

教師は子どもの言語環境を日頃から注視してとらえ、更新していくことが肝要である。今、子どもがその言葉に対してどのような解釈をしているのかという現在地をとらえることは、その子の言語感覚を磨くためにどのような環境を設定すればよいのかと考えることにつながる。子どもの現在地と新たな学びのつながりを踏まえ、子どもの言語環境と材とのズレや重なりを見出していく。それらに基づいて学びをデザインすることで、子どもが理解したくなるような必要感が生み出され、自身の解釈や他者の解釈に対して立ち止まったり、自分のもっている言葉と出合った言葉を擦り合わせたりしながら、より自身の解釈を確かなものにしていく。子どもの必要感のもととなるズレや重なりを認知するための手立てとして、例えば、読みの視点を設定したり、材と出会う順序を工夫したり、多様な解釈と出会う場を保証したりすることが考えられる。

これらの環境設定の根拠となるものは常に「言葉」を介して捉えた子どもの「今」に他ならない。毎時間の子どもの表れを切に見取り更新を掛け、子どもがどのようなズレや重なりを認知しているのかを基に次時以降のかかわりを精査していく。『その子らしく学ぶ』子どもを支える存在である私たち教師も大切な環境設定の1つであると言えるよう、愚直に子どもの「今」を見つめ続けていきたい。